



南アフリカ西ケープ州の自然保護区で、選別交配によりクアッガに近づいたシマウマの群れ。体の後ろ部分のしま模様が少ない(中野智明氏撮影・共同)



南アフリカ西ケープ州の農場で行われた定例会議後、談笑するエリック・ハリー(中央)ら「クアッガプロジェクト」のメンバー。欧州各地に残るクアッガの割製を写したポスターも作った。(中野智明氏撮影・共同)

を引き受けていたクレイ・ラードナー(49)が「計画を進めるべきだ」と強く張り、民間非営利団体(PO)を設立した。

取りまとめ役に就いたラードナーは寄付頼みだった。それまでの運営方法を見直し、プロジェクト推進に必要なシマウマを除く数十頭の売却を提案するなど、金確保にも乗り出した。

シマウマに家族の名前を付けてかわいがっていた農場主からは反発も出たが、ラードナーは「成功させるために必要なんだ」と説得。全データをデジタル化し、ウェブサイトで立ち上げ、成果を地元住民に披露することも検討している。

チームの目標は、外見はクアッガと変わらない「ニュー・クアッガ」の群れを10年以内に国立公園など一定の自然環境に放つことだ。

ラードナーは、自然を愛しクアッガ復活に生涯を捧げたラウに思いをはせる。「ラウの夢が現実となるその日、彼はどこから僕らを見て喜んでくれるだろうよ」

(共同通信ナイロビ支局長、吉田昌樹)文中敬称略

クアツガ復活計画

地球人間模様 @南アフリカ



雄大な岩山の麓に広がる緑豊かな自然保護区に、その動物の群れはい。シマウマのようなが、臀部や脚部にしま模様がある。それが「クアツガ」だ。南アフリカ西ケープ州の保護区の管理員バーナード・ウディング(39)が、口笛を吹きながらゆっくり群れに近づく。

過ちを正したい

プロジェクト創始者のレイノルド・ラウは2006年2月、74歳で死去したが、「人類の愚かな過ちを正したい」という遺志はウディングら仲間と共に行き継がれた。

0年余を経た1987年、同種のシマウマを別交配させてクアツガの復活を目指す計画がケープタウン周辺で始まった。だが、製製技師として1959年からケープタウンの博物館に勤務したラウは「シマウマの一種」と確信した。ドイツ生まれのラウは子どものころ、ドイツの動物園で絶滅したウシの一種を交配で復活させようとした取り組みに感銘を受けた。欧州各地を回り、残っているクアツガの製製23体のうち21体を調査。動物学にも相談するなどし、

特徴が似たシマウマの掛け合わせによる復活計画を立てた。博物館にある標本から採取した肉片のDNA鑑定などをも米国の大学に依頼、その結果、クアツガはサバンナシマウマの亜種と判明した。

遺伝子技術進歩後押し

有史以来、乱獲や自然破壊などでなく現代的なものになりつつある人類の活動の影響で多くの生物が地上から姿を消した。国際自然保護連合(IUCN)によると、世界で絶滅した動物種は16世紀以降、クアツガを含め700を超えている。

絶滅は本来「不可逆的」なものだが、絶滅動物の復活を目指す試みは世界各地で続けられている。特に近年の遺伝子技術の進歩で、復活が「夢物語」から現実的なものになりつつある。

最近では絶滅動物復活に向けたDNA導入する可能性がある」という。南アフリカのクアツガ復活プロジェクトも「将来的にクローン技術を用いる」という。

(文中敬称略)

よみがえれ絶滅動物

駆け回っていた。しかし入植した白人が狩猟で乱獲、1883年に最後の

間によって引き継がれた。

体の後ろ部分が茶色でしま模様がなく、ロバと

を受けることがある。欧州各地を回り、残っているクアツガの製製23体のうち21体を調査。動物学にも相談するなどし、

4世代ほど交配が進めばクアツガの特徴を持つ動物が生み出せると考えた。発足時からプロジェクトに携わる遺伝学者で元

創始者の思い継承

大学教授のエリック・ハーリー(72)が振り返る。87年、しまの少ないサバンナシマウマ9頭を隣国ナミアンから移送し、交配を始めた。10人足らずで始めた

ただ、プロジェクトに對しては当初から、科学者や環境活動家らの批判も多数あった。「自然の操作だ」「絶滅寸前の動物を救うべきだ」「実物の製製に比べ体の色が白い」「外見だけでは本物のクアツガ復活に成功したと

多くの生物を絶滅に追い込んだ「人類の過ち」の修正を目指すプロジェクトチームは、批判を率直に受け止める。ハーリーは「『保護』でなく『復元』プロジェクトだ」と強調。「既にクアツガ復活に成功したと言えるが、批判を考慮して『ラウ・クアツガ』と呼ぶことにした」と言う。

プロジェクトの創始者で中心人物だったラウを失ったとき、チームには動揺が走った。だが、自らも農場主として交配用のシマウマを引き受けていたクレイグ・ラウドナー(49)が「計画



南アフリカ

雄大な岩山の麓に広がる緑豊かな自然保護区に、その動物の群れはいいた。シマウマのようだが臀部や脚部にしま模様がほとんどない。「あれが『クアッカ』だよ」。南アフリカ西ケープ州の保護区の管理員バーナード・ウディング(39)が、口笛を吹きながらゆっくりに近づくと、

06年2月、74歳で死去したが、「人類の愚かな過ちを正したい」という遺志はウディングら仲間によって引き継がれた。



南アフリカ西ケープ州の自然保護区で、クアッカに近づいたシマウマの群れ。体のま模様が少ない

絶滅動物復活に尽

かつて南アの草原には群れをなしたクアッカが駆け回っていた。しかし入植した白人が狩猟で乱獲、1883年に最後の

一頭がオランダの動物園で死んだ。それから100年余を経た1987年、同種のシマウマを選別交配させてクアッカの復活を目指す計画がケープタウン周辺で始まった。

プロジェクト創始者のレイノルド・ラウは20

シマウマを足して2で割ったようなクアッカは、長く「独立種」と信じられてきた。だが、剥製技師として1959年からケープタウンの博物館に勤務したラウは「シマウマの一種」と確信した。

一種を交配で復活させようとした取り組みに感銘を受けたことがある。欧州各地を回り、残っているクアッカの剥製23体のうち21体を調査。動物学者にも相談するなどし、特徴が似たシマウマの掛け合わせによる復活計画を立案した。

博物館にある標本から

批判覚悟「人類の過ち正す」

採取した肉片のDNA鑑定などを米国の大学に依頼、その結果、クアッカはサバンナシマウマの亜種と判明した。

「全てはそこから始まった。クアッカの遺伝子がサバンナシマウマに残っているなら、4世代ほど交配が進めばクアッカの特徴を持つ動物が生まれ出せると考えた」。発足時からプロジェクトに携わる遺伝学者で元大学教授のエリック・ハーリー(72)が振り返る。

エピソード

有史以来、乱獲や自然破壊など人類の活動の影響で多くの生物が地上から姿を消した。国際自然保護連合(IUCN)によると、世界で絶滅した動物種は16世紀以降、クアッカを含め700を超える。

絶滅は本来「不可逆的」なものだが、絶滅動物の復活を目指す試みは世界各地で続けられている。特に近年の遺伝子技術の進歩で、復活が「夢物語」でなく現実的なものになりつつある。

現存する特徴が近い動物を選別交配させて絶滅動物の復活を目指す取り組みは20世紀前半から複数行われてきた。幼かつ

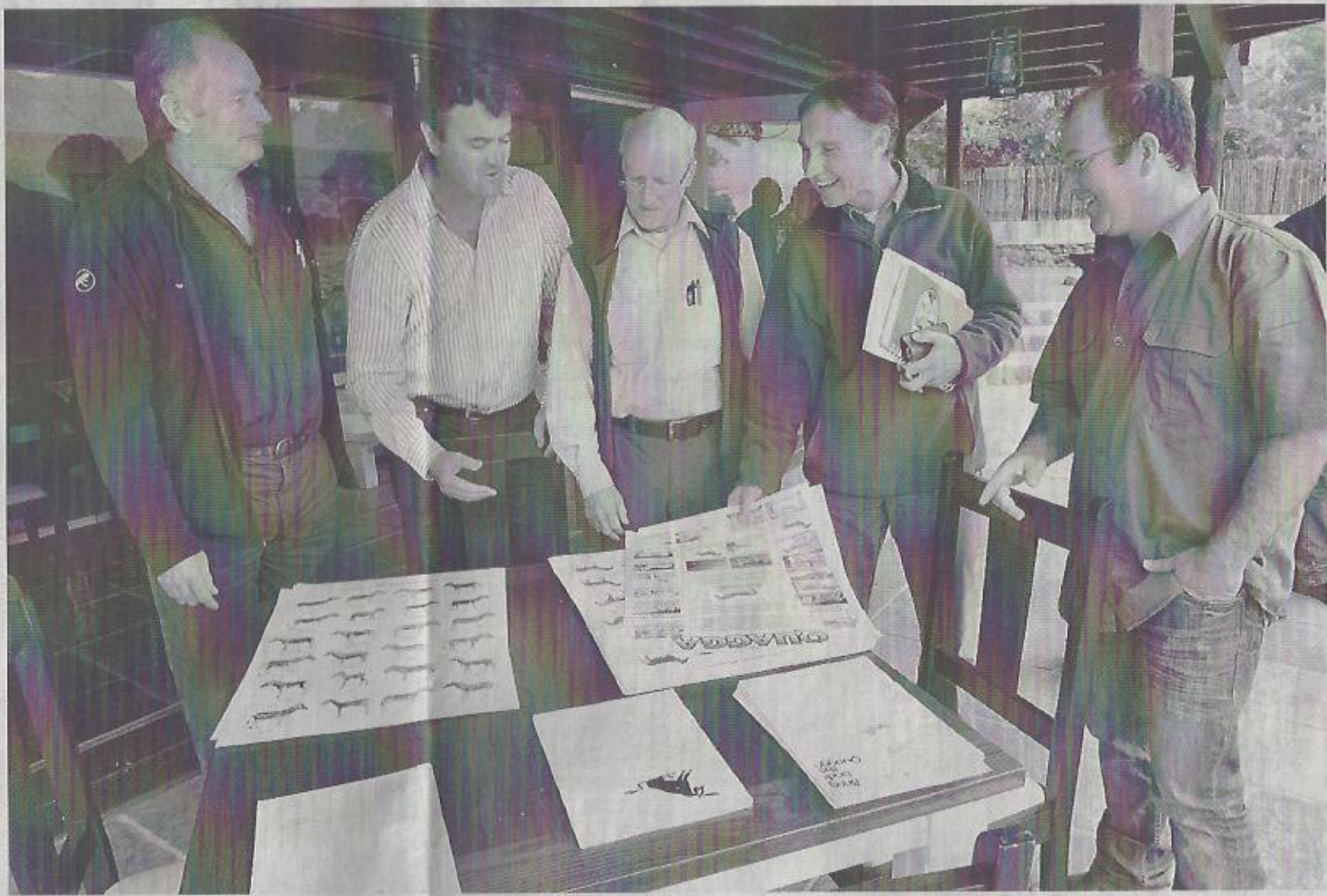


南アフリカ西ケープ州の農場で行われた定例会議後、談笑するハーリー(中央)ら「クアッカプロジェクト」のメンバー。欧州各地に残るクアッカの剥製を写したポスターも作った(いずれも撮影・中野智明氏=共同)

絶滅動物の復活計画

批判覚悟で「過ち正す」

雄大な岩山の麓に広がる緑豊かな自然保護区に、その動物の群れはいた。シマウマのようだが、口笛をなしたクアツガが駆け回っている。ド・ウディング(39)が、口笛をなしたクアツガが駆け回っている。



◆176◆

南アフリカ西ケープ州の農場で行われた定例会議後、談笑するエリック・ハーリー(中央)ら「クアツガプロジェクト」のメンバー。欧州各地に残るクアツガの剥製を写したポスターも作った

(撮影はいずれも中野智明・共同)

クローン技術が実現の鍵

有史以来、乱獲や自然破壊など人類の活動の影響で多くの生物が地上から姿を消した。国際自然保護連合(UCN)によると、世界で絶滅した動物種は、動物を遠く離れたところに再導入する特徴が近い。最近では絶滅動物復活

有史以来、乱獲や自然破壊など人類の活動の影響で多くの生物が地上から姿を消した。国際自然保護連合(UCN)によると、世界で絶滅した動物種は、動物を遠く離れたところに再導入する特徴が近い。最近では絶滅動物復活

た。しかし入植した白人が狩猟で乱獲、1883年に最後の一頭がオランダの動物園で死んだ。それから100年余を経た1987年、同種のシマウマを再導入させてクアツガの復活を目指す計画がケープタウン周辺で始まった。

プロジェクト創始者のレイノルド・ラウは2006年2月、74歳で死去したが、「人類の過ちを正したい」という遺志はウディングら仲間によって引き継がれた。

そこから始まった

体の後ろ部分が茶色でしま模様がなく、ロバとシマウマを足して2で割ったようなクアツガ

したDNAの機能を他の動物の体内で復活させた。2008年に発

表、将来のクローン誕生が可能になったとした。また、マンモスをクローン技術で復活させようとする研究も近畿大などで進め

地球人間模様 @南アフリカ